

甲陽だより

枯淡

甲陽学院 高等
中学校長

小河清麿

先日(十二月十五日夜)の「この人と語る」というテレビ番組は、松本清張氏を聞んでのものだった。この氏の述懐の中で、「自分も近頃では、時々想像力の枯れかけていくような不安をふと考えることがある。人間は年をとると、あの人は枯れてきたとか、枯淡の境に入ったとかいうが、あれは駄目だ。まして小説を書く者には、とんでもないことだ。モームにしても、他の外国の作家でも、あの年になってもあのような若々しい作品を書いていてではないか。……」というように意味のことを述べられていた。この氏の口から出た言葉としての「枯淡の境……」に、私は強い衝撃を受けた。その時まで聞くでもなく慢然と視ていたこの番組を、それから身をのり出すようにして視ていた。

「枯淡」。これには我々東洋人、特に昔の日本人(?)には一種の理想のように思える言葉の響きに受けとめていたような気がしたからである。なるほど松本氏のあの風貌、ギリギリとメガネの内からのぞく眼光、動きは少ないが何事もすげすげとものを言うあの厚い唇をみていると、きれいごとの枯淡などは、ふっ飛んでしまい、前へ前へ、ただ前進あるのみと思わせる気魄を感じさせずにはおかない。この氏のするどい述懐を聴きなが

ら、一方では、また先日読んだある記事のことを合せて考えていた。その記事とは、第一生命の現在は相談役になっていられる矢野一郎氏の最近の述懐である。

「私は遷居の頃から、視力が衰えはじめて、六十五才頃になって矢継早やに眼をわずら内障の手術を最後として漸く常人の三割位の視力を残すことが出来た。その後数年を経て右眼も悪くなり、亦数回手術をしたが、不幸にして、右眼は視力は零である。左が少し見えるだけだが、やはり疲れるから用のない時には眼を閉じていることが多い。(中略)；思えばたしかに神経を随使し続けたのだが、終始夢中で気付かなかつたのだから、その罰として視神経がダウンしてしまい、半めくらになったのも仕方がない。(中略)；これから未来に生きようという若い人が眼を失うことは大変な不幸である。然し私などのように、今から先の世の中には用事のない老人、しかも今までに充分見たいものを見、やりたいことをやってきた者にとつては、この辺で眼が悪くなることは返つて一つの救いであり、恵みであるかも知れない。大体我々ももう未来に口を入れるべき年齢ではない。む

発行所
西宮市甲子園高瀬町3番2号
甲陽学院同窓会
電話西宮(0783)41-0622番0623番
電報西宮 6663
印刷所
清原印刷
神戸市兵庫区中道通3丁目3-6
特戸部電話(078) 675-3765 (代)

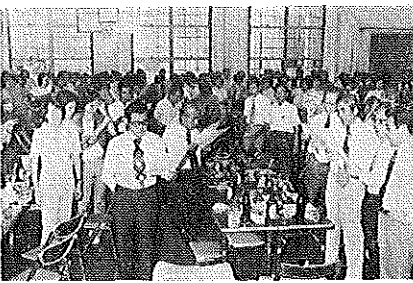
しろ、過去の貴重な体験を伝えるべき立場であらう。神様にもそんなお考えもあるのではなからうかなどと思つたりしてほえむこともある。」

この矢野氏の心境の陰には、氏も述べておられる通り、「私の生涯の中で、四十五、六才から六十才位までの十五、六年間は、健康に任かせて不眠不休で働いた。剣道で鍛えていたから体力には自信があったが、日夜神経を勞することばかりだった。戦争末期の社業の難局、敗戦による会社の破局、併せて本社社屋の接収などと、心痛に追いまくられ、ずい分ひどい無理を重ねていた。殊に連合軍相手の交渉などでは、秘書も、タイピストも使うことはできず、全く自分独りで、あちらの

夏季大会報告

八月二十三日、我等五十六回生の不徳のいたすところか、全同窓生の願ひも空しく生憎の雨模様。それも台風接近と不幸に不幸が重なり、関係者一同今大会の成否を案じていたが、第一回から今春卒業の第五十六回まで約二七〇名の参加者を得、準備した席も足りない程で、当初の心配もうれしい悲鳴に変わった。まことに「案ずるより生むが易し」である。

大会は恒例により同窓会会長、学校長、理事長の挨拶に始まり、乾杯を経て、今大会最大の呼び物「おはよう、パソナリテイ」でお馴染みの人気DJ中村鏡一氏が某球団の応援歌「六甲おろし」と共にさっそうと登場。大会はクライマックスとなった。彼中村鏡一氏は全国でも有数の「眠れる虎」ファンで彼の話し次第にプロ野球特にその「眠れる虎」の話へと移っていった。同窓生の中にも



幹部に体当りをして、理解と援助を求め通した。お蔭で第一生命も消えずに済んだ。その後は生保協会の会長を八年間もやらされて、業界の再建の見通しが立つまで苦勞した。六十才になって、やつとホツとした時、急に疲れを感じ始めて、……と。このように人として出来る限りのことを思い残すことなくやり通した満足感も現在は大きいであらうが、不眠不休の活動をしておられた時の矢野氏に、今この番組の中の松本氏の心境と通じるものがあつたのではなからうか。

このように思い残すことのないよう現在を生き抜くこと、その難しさ、その大事さなどを考えながら、この番組の終るまで、その座談の輪の中にあるようにして視ていた。

多数「眠れる虎」ファンがいて彼の話に夢中になり、あるまじき「虎」の優勝に夢を馳せていたようであった。結果は周知の如く新星カープが初優勝したが、今度は中村氏は一体どここの毛をそののでしょうか。

鏡ちゃんコーナーが終了したところで我が愛すべき母校のアンサンブル部による演奏があり、そのあとで大会は会食に移り、皆が思い出話や世間話等に花を咲かせていたようであった。

大会は平穩無事に進行し残すところもあとわずかとつたところ、なつかしき校歌、学院歌、応援歌を参加者全員が声をはりあげて斉唱した。次に今大会唯一のパブニング、今大会司会者川淵秀和氏(四四回)が昔とつたときねづかとやらでフレーフレー甲陽とくり返し、大会にまたひとつ花を添えた感があつた。そして藤井大会準備委員長の前によって第五六回同窓会夏季大会もすべて幕をおろした。

(五十六回卒 石渡秀二)

理事会報告

九月二十五日(木)午後五時三十分より、母校同窓会室にて。出席 約二十名。
一、夏季大会収支報告。異議なく承認される。概要左記の通り。

(収入) (支出)
参加費 二八三、〇〇〇 会食関係費用 二二五、二〇五
同窓会 予算より 準備・片付けなど 一八一、〇六〇
経常費 一三三、二六五 諸費用 一八一、〇六〇
計 三九六、二六五 計 三九六、二六五

二、来年度夏季大会開催方法並に時期について。
五十五回、山村君のアイデアであった『夏季大会は新卒業生の創意と奉仕によって運営する』という方向は、本年度二回目を終えて、大変有効で、活気のある夏季大会を作り上げてくれることが確認された。そしてその事は新卒業生の側にも何かとプラスの多いことも認められる。今後この方向を定着させてゆきたい。このためにはかなりの数の新卒業生の動員を必要とする。一方新卒業生としては始めての開放された夏休で夏休の前半は旅行その他の計画をもつことも多く、従って夏季大会の時期は現在のままとせざるを得まい。

三、新卒業生への記念品について
昨年通り認印とする。費用の点から他に適品が見当たらないし、また名さしで贈られると

いう点にも意味がある。
四、名簿刊行について
「五年毎に」という慣例に従えば昭和五十二年度発行ということになるが、高校移転完成の記念事業の一つにしたいので、これにあわせて多少おくらせたい。尚、同窓会として名簿以外に今一つ記念事業を計画したい。費用約六十万円、本年度三十万円、来年度以降年十万円ずつ三カ年としてはどうか。例年母校に寄付していた分を当分中止して積立てることにする。事業内容は未定であるのでよいアイデアがあれば、どんどん申出てほしい。
五、年会費増額に伴う処置について
現在「甲陽だより」を送付している卒業生六、三〇〇名中、年会費納入者は一、六五〇名(うち前納者四五〇名)でほぼ前年通りこの結果、本年度予算より約六十万円増収の見地である。この処置を次のようにしたい。
・高校移転記念事業積立(前項四)三〇万円
・来春二月発行「甲陽だより」
郵送料値上り分 一六〇〇
経常費(人件費など) 繰入れ 一四〇〇
計 六〇〇〇

尚、「甲陽だより」は毎発行期に約一五〇通が宛先不明で返送されてくる。次回までに調査その他手を尽して、できるだけこれを埋めるが次回には、またほぼ同数(別人)が返送されてくる、というような状況を繰返している。転居・地番変更などの場合には是非その旨を同窓会室の方へ連絡されることを切に希望する。

年会費納入表

(十一月二十日現在)

回期	49年度	50年度	49年度	50年度
37	19	16	41	36
38	17	15	24	19
39	22	21	16	15
40	22	23	17	14
41	20	20	22	24
42	20	20	19	18
43	27	24	28	28
44	26	19	28	28
45	37	36	23	25
46	53	47	26	26
47	30	44	20	27
48	44	37	23	23
49	27	40	11	12
50	53	43	13	14
51	53	55	14	15
52	50	49	15	16
53	60	58	17	18
54	86	79	19	28
55	0	99	20	22
計	1552	1573	49	46
			40	49
			27	32
			31	31
			10	20
			2	10
			2	5
			1	5
			2	24
			3	14
			4	17
			1	13
			7	21
			54	79
合計	1606	1652	0	36

会員名簿整理について

お願い

甲陽だよりを出す毎に毎にお願しているのですが、一番情けなく思うのはこれを書くときである。前回の甲陽だよりが届いて今回は届かない少しのことこんな事はなくなるのではないか。今回も二〇余通だ。協力して年会費を納入している会員の経常費の無駄費いだ。少しは考えて欲しいものだ。

記

第二回	庄本 茂	第三十七回	田川和宏、中村圭吾、杉浦敏一
第五回	太宰二郎	第三十八回	杉之原大治
第七回	森永登規雄	第三十九回	坂本 宏、寛 義雄
第九回	渡辺久秋	第四十回	小松啓七、伊藤 久、栗野紘幸
第十回	岡本寛吾	第四十一回	天野泰次、五十田安夫、生村吾郎
第十一回	斎木士門	第四十二回	中西康孝、松田宗昭、東 正泰
第十三回	中井一彦、建部正雄、谷向典夫	第四十三回	栗野信次、滝本 武、木村寿太郎
第十四回	矢野道明、打川 裕	第四十四回	友国慈一郎
第十五回	貴田礼三	第四十三回	池田 篤、小田中 健、熊谷和夫
第十七回	広瀬二郎	第四十四回	西島 直、藤本 企、松原光治
第十八回	灘谷末治郎、森長権太	第四十五回	高田輝昭
第十九回	生駒 茂、小早川一郎、安藤 理	第四十六回	末井克夫、浜田新二、藤井 肇
第二十回	庄田耕次郎、岩谷和夫、松井克之	第四十七回	高谷 徹、山部昭弘、長谷 亮
第二十一回	金子 良	第四十八回	尾本 博明
第二十二回	大平方寿男、鈴木康允、村田 収	第四十九回	川本雅隆、小浜哲雄、則岡節雄
第二十五回	名田甲子男、小川和夫、芳村嵩夫	第五十回	米本公一
第二十八回	越智雅夫、田中一正	第五十一回	神谷 律
第三十回	井上和男、谷 尤	第五十二回	神谷 律
第三十一回	古川皖庸、松浦友四郎、岩本 武	第五十三回	吉川研一、大林直樹、岸川 滋
第三十三回	酒井 一、勝間 哲、花房高人	第五十四回	植田雅人、奥谷 晶、飯田敏康
第三十五回	越智俊彦、武内 進	第五十五回	神谷 徹、黒田章裕、金沢輝雄
第三十六回	有間光信、上田好一、辰 卓	第五十六回	小西 真平
	寺沢洋介、堀越昭一	第五十七回	窪田浩一、田中克巳、早崎博之
	星野 中	第五十八回	村井 幸
		第五十九回	貝 篤、萩原秀昭、福島芳樹
		第六十回	横山和美
		第六十一回	伊藤亮治、尾野俊和、山本 晃
		第六十二回	辻 洋
		第六十三回	小原 裕
		第六十四回	森本隆夫、松本正義、田口正彦
		第六十五回	川添明良
		第六十六回	松岡泰三、奥平 健、杉原忠臣

夏期大会を想う

合 田 孝 治(第一回卒)

本年も台風六号に災いされて、予定していた屋外での行事は出来なかった。昨年のように当日になってからの予定変更とは違い前日の中に屋内設備に切り変えられたのがせめてもの幸わせではあった。

新しい同窓生を迎えてやる夏期大会が昨年より新卒業生の同窓によってプランをたて準備一切と当日の設営をすべてやる方針によって開催することになったのであるが、これはもっとも好ましいことであると思う、恐らく他の学校では見られないのではないか。

私個人としてもどうか永久に続けて貰いたいもので、念願もし、出来るだけの協力もしたい。前日会場設営の為、動員だけの努力もした新同窓の姿、当日跡始末した人々の努力を見てと本当によくやってくれたと感謝の念も湧いてくる。ここまでに至る構想も昨年度卒業の山村君が議長となりまとめてくれたのである。柳原、山田両先生は陰の指導者となって諸般を助言したのであった。中村光成先輩の奔走助力もあったが、立派なものであった。会も近年にない和やかな裡に進められた。

朝日放送の中村鏡ちゃんのこともあったのかも知れないが、今後何年もこの調子でやり、これを一つの甲陽同窓会のシステムとしてゆきたい。

只同窓として遺憾に思うのは母校の先生方の余り出席せられる人の少いことである。同窓会を学校でやることは母校を忘れないことと、今一つは各自の恩師と共に飲み、語ることに最上の目的でないか、甲陽出身の先生ばかりが同窓を送り出したのでない。学校に在職しておられる先生方すべてが共に教えられ送られた訳だから、せめて夏休みの一日を若き人々と共に語らい、或いは激励せられて彼らを育てて貰いたいものと思う。どうか来年度は多数の先生方の出席をお願いしたい。

古稀偶感

第三回卒 村上吉胤

今年 偶々 春には御影節範、秋には甲陽中学校のと、二つの同期会のお世話を受けてもらった。卒業以来五十年、多少の年の差はあるが、古稀に達した同級生諸君の健康状況に学校差のあることに気付いた。卒業者の実数に差があるため百分形で表すとA表のようになつた。生存率について、体調を三段階に分けてみるとB表の通りである。

(A表)

学 校 別	生 存 率	生 死 不 明	死 亡 率	
甲陽中学(大正13年卒)	40.00	4.21	55.78	含戦死者
御影節範(大正14年卒)	60.87	2.48	36.65	戦死なし

(B表)

健 康 状 況	甲陽中学	御影節範
A、健康又は日常活動に差支えない状況	63.16	78.57
B、体調悪く無理の出来ない状況	15.79	17.35
C、就床状況又は独り歩きは無理の状況	21.05	4.08

甲陽中学の諸君は主として大阪神戸とその周辺の都会的環境に育つた者が多く、節範学校の諸君は県下各地の農村地帯出身者が大部分という差異があるから、この数字だけで即断することは危険とは思ふが次のような皮相的な感想を抱いた。ただ、判断としては生るとは師範出身者が若干の例外を除いて教壇生活を活かしたのに比べ、中学出身者の業務は多種多様であることである。

教育の仕事に経済的な悩みとか対人関係の複雑さは皆無とは言われないが、他の職業に比べて、対象が児童生徒であるだけに比較的その悩みは少いと考えられる。私が退職後に経験したわずかの仕事にも教職中よりも金銭的な悩みが少くなつたと思つてゐる。

中学卒業の諸君はその後の学歴の有無に拘らず、卒業後の諸君は其の後の学歴の有無に拘らず、心身共に疲れることが多く、管理者となつては資金調達とか労務管理等に昼夜を問わず苦勞が多かつたと思像される。そうした事の累積が、生存率においても健康率においても師範卒業者を下回つてゐると思つても、当らずといへども遠からぬのではなからうか。

今や両校の同窓諸君のほとんどは現職を退き余生を送る状態にあるが、私は有終の美を飾り得なかつた落伍者ではあるが、教育に従事した事が、職業としては健康的なものであつたと確信し得たことが、世話焼き役の一つの報酬として受取らせて頂いたと喜んでゐる。 五〇・一一・一五記

伊東栄君を想う

合 田 孝 治(二回卒)

伊東君の毒舌を今一度聞きたいと念願していたが今は亡き人となつた。在学中は陸上競技部或は野球部に籍をおかれ荒れ坊の先陣にあつた君と僕とは余りにもかけ離れた存在であつた。旧神戸市内の小学校より進んだ人も、橋本君と二人だけになつたような気がする。思い出せば昭和三十年頃より稍々定期的な同期の会合をやり出しからは懇意の度を深め、お互いに母校創立五十年記念事業に協賛活動をするようになってからは無二の親友となり、常に適切なアドバイスを受けておつた。

考えてみれば君は幸福な人生を送つた徳な人間だ、戦事中は軍属として南方に行き、得た知己の一人がシンガポールの大統領となり、第二の故郷のようにして屢々出掛け、並ならぬ待遇を受け、遠く異国に於ては君一流の毒舌を惜しまなく吹き散らしたものである。私等グループでもその毒舌には只々感服して毒気にあてられたように拝聴せしめられ

たのである。然しそれは常に真意をつき私的な注告であり警告でもあつた。私自身として多大の感謝をせなければならぬ事がある。昨年末突然自身の不注意より意識不明のまま病院に担ぎ込まれた時家族のものより早く駆けつけてくれたのが君である。その際痛めた歯の治療を受け、忘れられない思い出を残して貰つてゐる。

戦後勤めたい会社が再建なり基礎も確立したのでその機に隠退することにしたのだが、偶然五千周年に一致して同窓のものに同窓会の事務をやつてやれと勧められ、懐しい母校に週二日やつてくることにしたが、仕事というものはどんな事でもやれば種々ぶち当たるものである。そんな時に必要なのが君であつた。これからは適切なアドバイスをしてくれた君が亡くなつたことは淋しい。昨今何か考へに耽れるとき、元氣を出してぶつかつて行けと遠くより叱咤せられてゐる様に思うと氣も出る。やはり君は僕にとつては良き友だつたのである。今は只冥福を祈るのみだ。

法人、学校、同窓会の合同懇談会

十一月二十六日恒例通り「かき十」で開かれた。出席者は辰馬理事長、学校長、両教頭、原会長、友岡、桑田、藤井各副会長以下二十一名。

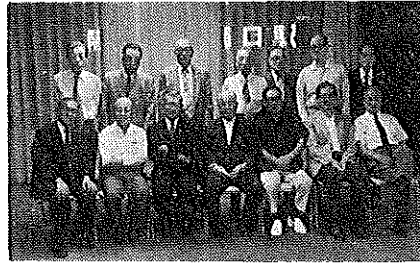
合田専務理事より、去る九月二十五日に開催された理事会の報告(別稿参照)があり、特に中学高校の先生方の夏季大会への御出席を要請された。次に原会長より高校新校舎落成に際して、同窓会として計画している記念事業の説明、続いて学校長より、新校舎建設工事の進捗状況について、予定よりあまり遅れない見込の報告があつた。本年は、合田専務理事の提案により、高校三年生担任の先生方もお招きして、同窓会の現状を知つて頂くと同様に、卒業生が積極的に同窓会に融けこむよう協力をお願いした。談笑のうちに、学校内外、過去や将来にわたる各種の話題が出て、約二時間後、和氣藹々、今少しの時間もがなと感懐じつつ散会した。

会員だより

甲陽会(第一回卒)

春季懇親会

例年は六月中旬に春季の会合を催するのであるが、世話役の不手際で七月十九日に宝塚ホテルで懇親会をもつことにした。開催日の間際になって突然に常連の辰馬修氏をはじめ伊東、野辺、宮崎卯吉氏が所用にて欠席せられた。十四名となった。



遠く東京より土居信三郎氏、名古屋より吉田長敏氏が馳せ参じられた。欠席の返事のあった三分の一が病氣にて行きたい、語りたいがどうにもならぬとの事がある、考えれば早や七十才以上のものばかり、第一戦で未だ活躍しているものもあるが、当然なかも知れぬ。秋に宮崎武男氏の御尽力によって広島へ一泊二日の懇親会が予定されているので打合せをなす。

懇談会となるがどうも話しが老年対策のよきな事になって終った。鮎子田氏が不老長寿の調剤方法を説かれたが、辰馬氏寄贈の白鹿が些かはいっているのでプリントを送って頂くことにして全員に郵送することで行けりしたが、話しはもとに戻りまた長寿法である凡人の浅ましきであることが浮き彫りせられたようである。

時刻に終わられて今秋を約束して散会した。土居氏より今度はいままでより特に親しみを覚えましたと感想の手紙を頂戴したが、皆も

同感であったと思う。参会出来るものの幸わせを感謝しましょう。(合田生)

秋季懇親会

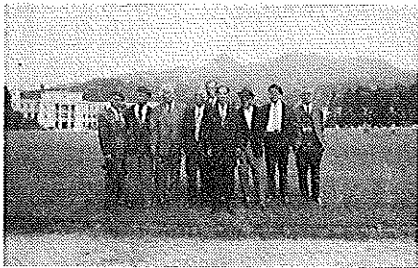
恒例となつて終つた秋の一泊懇親会を十一月八日、九日と広島で行つた。

宮崎武男氏の苦心の作戦計画である、新幹線を利用すると云つてもやはり東京より出席せられる土居信三郎氏にとっては長時間であり少し無理のように思つた。次回の一泊旅行は中京当りにした方が良いとは全員の声のようであるので吉田長敏氏に計画を依頼した。

一日目は平和公園に行き原爆の遺蹟館を見学して、かき舟で広島かきをして夜の街を歩く。宿はステーションホテル、今回はどうも集りが少く九名で、中島博氏の写真技術もちょっと淋しかったのではないかと思つた。

二日目は朝早くから江田島の海上自衛隊の技術学校を見学する、往年の日本海軍のメッカ海軍兵学校跡である。流石に世界の三つに数えられた学校である、建物の立派なのに驚嘆した。よくも明治時代にこんなのが建築出来たものだ。

大東亜戦時時代の遺品、遠くは日露戦争時代のもの、吾々に無言の教訓を示している思いがする。「ハワイ」襲撃の特殊潜航艇(米国より寄贈)もあった。よく見学すると二時間以上もかかるらしい。駆け走りの見学であったが一度は是非見る可きものだと思える。



呉に行き、呉飯島ホテルで昼食、且ての軍港である、自分も中学生時代叔父が海軍の御用達をやつていたのでよくこの港に来たもの

だ、その変ほりに今昔の感に打たれた。宮島に行く、平清盛の建立の厳島である、時節柄なかなかの出である。盛沢山の日であった。宮崎氏の苦心せられた計画だけに順序よく運び、土居氏も予定通りに東京へ帰えられた。ただ指定席の関係上一人、一人となつて別れて帰る淋しさがあり、残念であつた。

二日とも天候は満点であつた、泊ると夕食時に且ての時代の思い出の語らいがあるので楽しい。一年一回はかくあつても良いのでないか。

年配で参加の出来ない人が病人であることであるのが淋しい。今年も早や三人が亡くなつているのである、お互いに頑張つてお会い出来る機会には出て来て欲しいものだ。(合田生)

五十年目の五枝会

いま甲子園が建つているところは、私たちが甲陽中学生のころは枝川という大きな川が流れていた。その川の名をしのんで第五回卒業生で作っている「五枝会」が五十年ぶりの同期生大会をやらうと言ひ出したのは、去年の夏前のことだつた。

母校を巣立つてから半世紀、文字通り久しぶりに顔を合わせて、生きている喜びを分かち合い、懐旧談を交わし、人生を語ろう。お互いに老齢、少しでも早く、元気なうちに、というので十月六日夕刻、宝塚グランド・ホテルを会場に決行したのである。結果は予想以上に盛況だつた。集つたのは次の三十一名(アイウエオ順)

青柳秀一郎、荒木正保、井上康司、大崎福之助、岡信良、小西池樫太郎、河野長策、五島茂、沢田隆治、沢野実、篠部字門、高田久右衛門、太宰二郎、檀野義雄、角田茂一郎、豊原大潤、中島万蔵、中西剛六、能勢正元、峰谷直之、浜田増蔵、原清、福本義一、藤原

研三、増村政彦、宮部甫、森本督三郎、山中文夫、若田修、池上重恵、矢島孝雄。

はじめは自己紹介をきかないと名前を思い出せない人もあつたが、二、三分も話しているうちに想ひ出話に花が咲き、卒業アルバムや年令十五才と記入された当時の阪神電車定期券などを回覧するうち、お互いにアダ名で呼び合う中学生時代の昔に還つて談話爆笑。ホテルの支配人も感謝してウイスキーを寄付するなど盛り上つたところで、なつかしの「甲陽行進曲」を全員合唱、記念写真撮影、そして朝日放送寄贈のおみやげを手に手に、また逢う日を期して散会した。当日の参会者一同の感想を集約すると「ああ甲陽中学は楽しかった」そして「ああ生きていてよかった」――さすが全員、明治生れだけに感傷的である。(山中記)

第二十回卒

すもも会

猛暑暑続く、七月夕方五時より、京都木屋町通の「鳥淵三」に於て、二十回卒李組の(すもも会)第六回クラス会が行なわれまし



た。枚方市役所勤務の、松木作治郎君の世話で、天明八年創業の重要文化財という古い伝統ある、鳥料理屋(鳥淵三)の、加茂川べりに張り出した、有名な(床)で、涼しい風に吹かれながら、鳥鍋を賞味しての、楽しい一夜でした。出席者は、何分年令柄、多忙な連中ばかりなので、僅か十名でした

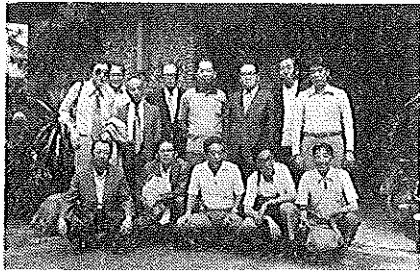
が、数学の永井勇一先生(小坊主、又はカマキリ)を招き、懐しい中学生時代の想い出に、花が咲き、十時半頃散会となりました。当日の出席者は、永井先生、松木、森田、筒井、木島、橋本、山下、平中、田納、中村、溝口、以上でした。(溝口記)

第二十一回卒

橘 会

例年に無く残暑酷しい、九月十四、五日の連休を利用して、K組の「第四回橘会」を、少々遠くても、思い切り魚料理を喰べ様と云う事で、渡辺三郎君の世話により、伊勢鳥羽海岸「相差」の「あづま旅館」に於てやる事になった。

十四日、快晴の鳥羽駅より、景色の素晴らしい、パールスカイランをドライブして、四時頃旅館に着いてみると、余程嬉しかったのか、暇だったのか、出席予定者全員十五名が既に集って居たのには驚かされた。



卒業後、三十年振りと云う新顔も二、三、見られ「ヤアヤア」とか「お前誰やったかいな。」等と騒ぎ乍ら、早速風呂に入り、六時より宴会を始めた。流石に魚の本場だけあって、伊勢海老、鯛、ハマチの活づくりや、貝の磯焼き等の超豪華料理に、酒、ビール、ウイスキーの飲み放題で甲陽時代の悪童ぶりに話を咲かせ、食後はまた一室に集まり、飲み続けや、大放言で、やっとこさ寝さして貰ったのは、午前三時という始

末。

翌十五日は、流石に社長、専務部長と各々用事の有る者が多く、午前十時旅館出発、各方面へ散って行った。

当日の出席者は、名古屋より藤田福夫先生、三十年振りの高橋純平、東京、広島、福井方面より、毛利、稲葉、近藤、大阪近郊は大伏、入間田、筒井、大槻、宮津、福井、井川、奥野、渡辺、溝口の以上十五名。楽しい、豪華な一泊旅行であった。

生物部OB会

(溝口記)

浅野昌隆先生が母校甲陽を辞められたのを機に、生物部卒業生の手により、記念誌「こまくさ」を発行しましたことは「甲陽だより第22号」に御報告させて頂きました通りであります。

この事業を機に、これまで音信不通でありました何人かの卒業生とも連絡がとれ、また、一度久方振りに集まろうとの声も高まりましたので、母校の第56回同窓会(50年8月23日)に便乗させて頂く形で、OB会開催の御案内を致しましたところ、当日は、浅野先生を初め14名のOBにお集り頂きました。

同窓会当日はあいにくの天候で会場が体育館に変更となりましたが、浅野先生を中心に会場内の一角を占拠させて頂き、近況報告やら、懐しい夏山登山や音展等の思い出話に楽しい一時を過ごしました。浅野先生におかれましては、最近はお身体の調子もよく、今夏は北アルプス後立山方面へお出かけとのこと、久方振りに先生の山の写真を見せて頂き、一層話がはずみました。

同窓会の後は、記念撮影、大阪梅田での二次会と先生には最後までおつき合い頂き、またの再会を約して散会しました。クラブの同窓会と言うものは、普通のクラス会とは、また趣きを異にして、先輩、後輩

と言う縦のつながりも含まれており、今後とも機会があれば行ないたいと考えております。現在、連絡がとれておりませんが、左記幹事まで是非、御連絡下さいませようお願ひ申し上げます。なお、記念誌「こまくさ」もまだ残っておりますので、御希望の方はどうぞ御連絡下さい。

△OB会出席者▽ 浅野昌隆先生、長谷川祐蔵(39)、大塚昭、木村通夫、苗村康次(42)、佐藤茂(43)、本田忠士、四宮景虎、津久井啓太郎(44)、木下タロウ、鮫島章郎(45)、遊磨正秀、大倉幸彦、上山雅之、浜田稔(47)。
△連絡先▽ 尼崎市西難波町2・19・19 大塚 昭

また、生物OB会では、母校生物部から「生物甲陽・11」発行にあたって支援要請を受け、直ちに、カンパ及び同誌OBの買用の原稿について、OB各位の御協力をお願い致しましたところ、早速、23名の方から三万八千円のカンパを頂きましたばかりでなく、浅野先生からもカンパを頂きました。

これらのお金は、11月10日にOBの皆様を代表させて頂きまして幹事より母校生物部へ手渡させて頂きました。「生物甲陽」は現在すでに印刷中で、御協力頂きました皆様方へは、母校生物部より新年早々にはお届けできませんものと思っておりますので、皆様方には、後輩諸君へのアドバイスと激励をお願いする次第であります。(42年卒・大塚 昭)

C組クラス会

昭和四十二年卒業

我々のクラスも甲陽を卒業して早くも八年の年月が過ぎ、ほとんどの者は、社会の第一線で悪戦苦闘中で、すでにオヤジになった者も何人かいる年頃となりました。

進学、就職さらには転勤、結婚等により連絡がつかない者も増え、加えて我々クラスのクラス会幹事の山崎和行君がカナダへ留学中と

あって、久しくクラス会も行なわれませんが今回、森一正君の音頭と尽力により、集まれるだけでも集まろうと五年振りにセミクラス会を去る9月26日に大阪は北新地の雲仙で行ないました。

当日は、お忙しい中を恩師・谷本勇先生にもお越し頂き、9名が集まりました。なかには、卒業後初めて見る顔もあり、丸坊主に学生服から一度に背広にネクタイへの大変身に最初の内、少々とまどいもありましたが、飲みそして語る内につしから10年前に戻って、思い出話から近況報告へとまたたく間に予定の時間が過ぎてしまいました。



今回は、話が急に決まったことや、幹事の森君の方から電話で連絡がとれた者しか集まれませんでしたが、次回はもう少し準備をして集まろうと言うことで散会しました。就職や結婚等により居所が変更になっている方は、是非、御連絡下さい。

最後になりましたが、幹事役として連絡をして準備に骨を折ってくれた森一正君に、心よりお礼申し上げます。

△当日出席者名▽

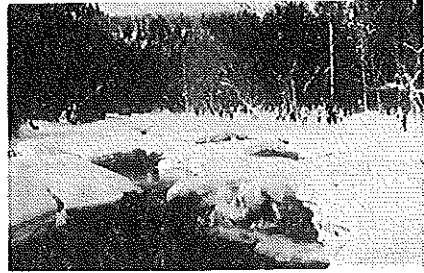
- 谷本勇先生、天野利郎(住友精密工業、池内英治(吹田市市民病院)、池田研介(京大D・C)、井上英郎(大阪ガス)、大塚昭(住友電気工業)、木村通夫(大阪ガス)、藤本明(長瀬産業)、宮本信夫(大阪ガス)、森一正(住友化学工業)。(42年卒、大塚昭)

百歳のスキーヤー

浦谷 規 (43年卒)

長雨の後の久しぶりの晴天のせいか研究室から丹沢の向うに美しい雪の富士が見える。運動不足の今の生活からか、昨年カナダ・モントリオールのクロスカントリースキーがつくづく懐かしく思い出される。我がサツカー部の先輩「テイさん」(中村氏)から昨年一年ロータリー財団の奨学生として過したモントリオールでの事を書く様にとの事なので、スポーツが「長寿の秘訣だ」と言う百才のカナダ・スキーヤーの思い出を書く事にします。

北米では一昨年あたりから、ノルディクスキが従来のアルペンスキーに比べ爆発的人気を受けた。日本と同様の不況のカナダでも、このスキーを売買する人達だけはばか景気だったと聞きもした。実際、よくいった大学所属の実験農場あるいはローレンシャン丘陵地帯では、弁当を背にスキーツアアを楽しむ人達の老若男女グループで賑わっていた。このブームの最高潮は、ジャック・ラビットスキー列車であった。これは通称ジャック・ラビット(ヘルマン・ヨハンセン氏)の百才記念の祝賀に二十年以上廃止になっていたスキー列車を鮮えらせたのである。参加者約千数百人、銀色にまぶしく輝く二階立て列車が、快晴のモントリオールの北の丘陵地を走った。スキーマラソンの出発点では、モントリオールらしく英仏両国語での長々とした挨拶。さて、当のラビット氏の登場となり、氏曰く「挨拶はもうたくさん/スキーに出発



しよう」と。途中温めたワイン・スーベ等のサービスを受けそれぞれの弁当を食べ、約二〇kmのコースを半日かけて、ジャック・ラビット創設のスキー路を滑ったのである。夕焼けの最終点でお祝いに花で飾られた額ぶちを贈られた氏は、その中に顔をはめて「Thank you」主催者達、CP汽車、Sライフ・インシュランス。皆んな私の様に長生きしてSライフ・インシュランスを喜ぼうか

「このモントリオールの丘陵地に、私はホテルからホテルへとスキー路を作った。クロスカントリースキーはコマーションズムから自由な自由を愛するスポーツである?夏はカヌー、冬はクロスカントリースキーを」とユーモアあふれる髪しゃくたるスピーチで喝采を博した。帰りの列車内では、それぞれ持参の楽器を演じ、合唱し百歳の祝いを再び祝ったのである。

原爆記念日に際して

在広島 十五回卒 大林 豊 治

「ある日」
祈り虚しや 背は裂けぬ
空襲の 枝の半ばに 息絶えて

「この日」
汗の髪くわえたる娘の 虚なる
Gパンに ゼッケン赤旗 原爆忌
「その夜」
天漢に 空しき憤怒 鬼瓦

原爆はドーム南隣の西蓮寺墓地辺りに墜ちました。そこには私の先祖代々の墓があります。

野球部より

県立農業に1-0、淳心学院に6-4と、私が高一、高二のとき連続して夏の大会で敗れた。だから高二の夏でやめる気になれなかった。三年まで続けた者は私以外に二人いたが、おそらく同じ気持であったろう。「よしやるぞ」と意気込んでみたが、まず人数が揃わない。いや揃っていたかもしれないが試合に出れそうなのは九人に満たなかった。だからまず試合ができるようにするのが目標だった。それでも、みんながんばって、新人戦では、二回勝つてあと一勝で県大会という所までいった。ここまで順調に伸びていたと今から思うとそう感じられる。つまり出出したのは、冬の練習に入ってからであった。冬は大それたと常々言われていたし、自分でもそう思っていたのであるが、やはり能率よくいかなかったようである。自分では相当走ったつもりであった。サキットもかなりこなしたつもりであった。しかし、春に入ったの試合で自分の考えのあまかったことを思い知らされた。動きがまるで違うのである。去年は大したことはない思っていたチームが、強く感じられた、というよりも事実強くなっていた。私は後悔した。があとどの祭りだった。それからの試合は、勝ったり負けたりだが、惨敗が目立った。そして夏の大会では、二十試合程した中で最も動きのない、振りの鈍い悲惨なゲーム(尼東8-1-18回)になってしまった。あの時のみじさは、四カ月たった今も少しも薄れていない。ゴールド負け、甲陽野球部の諸先輩やOBの人たちにどんなにけなされても仕方がないと思う。しかしこれだけは言いたい。ぼくらはいい加減にやったのではないのだ。強くなりた、勝ちたいと思っ気持は、どのチームにも負けなかった。これだけは確信する。

(野球部主将 阿部浩也)

昭和51年度入学志願者心得

学校法人 甲陽学院中学校
辰馬育英会

1. 募集人員 男子約170名
2. 出願期間 昭和51年2月12日(木)から2月23日(月)まで
上記期間中の日曜日を除き毎日午前9時から午後4時まで(土曜日は午前中)
3. 出願手続 (1)本校事務室で入学志願者名票、写真台紙、調査書用紙、入学審査カードを受け取ること。(1組200円)
(2)入学志願者名票、入学審査カードに必要事項を記入し、最近撮影の写真(脱帽半身、規定の台紙にはりつけること)と審査料(6,000円)とを添えて事務室に提出し、入学審査票を受け取ること。
(3)調査書は、2月24日(火)までに本校に提出できるように出身小学校に依頼すること。(調査書は出願のさい父兄が持参されるか、又は出身小学校に郵送を依頼して下さい)
4. 入学審査 (1)審査内容 ①筆答審査 ②面接 ③身体検査 ④出身学校から提出の調査書審査
(2)審査期日 3月1日(月)筆答審査(国語55分算数55分理科45分) 3月2日(火)筆答審査(前日と同じ)面接及び身体検査(前半組) 3月3日(水)面接及び身体検査(後半組)
審査当日は8時20分までに登校すること。
5. 合格者発表 3月4日(木)午後5時本校内に掲示する。合格者は発表後直ちに玄関受付で入学審査票と引き替えに、合格通知書および入学に必要な書類を受け取ること。
備考 入学金 10万円 授業料(月額 8,600円) 諸費(月額 3,700円) 生徒会費(月額 130円) 育英会費(月額200円) 上記の学費は昭和50年度のもので情勢により変更することがあります。